生徒や学校の特色を生かした国立歴史民俗博物館活用のあり方
―日本の歴史を初めて学習する海外からの「帰国生徒」の視点に立つフィールドワーク学習―

東京学芸大学附属国際中等教育学校　秋山　寿彦

１．実施学年及び教科

中学校第２学年　社会科（歴史的分野）

２．学習のねらいと博物館の活用との関連について

はじめに

2007年４月に開校した東京学芸大学附属国際中等教育学校は、生徒の約30％が海外での教育体験を有する「帰国生徒」である。学校制度や学習科目が異なる海外での学校で学んできた多くの「帰国生徒」及びその保護者にとっては、学習する機会がほとんどなく、そのため既有の知識も皆無といってよい日本の歴史を取り扱う社会科学習に対して不安を感じている。

このような「帰国生徒」（第１学年４月入学と共に、各学年４月・９月編入生を受け入れている）を対象として、JSL（Japanese as Second Language＝日本語を第二言語として学ぶ生徒に対する）社会科学習オリエンテーションを実施している。ここでは、日本の歴史に対するイメージと日本の歴史を学ぶ動機に関するアンケートと面接として「海外学習経験調査」及び「学習言語としての日本語習得状況調査」を日本語教育の専門家と共同で実施している。

調査結果から、「帰国生徒」の日本の歴史の学習に対するとらえ方の特徴として以下のことが挙げられる。

小学校第６学年の社会科歴史学習で取り扱う歴史上の人物や文化遺産を中心とする基礎的、基本的な知識が十分でないことから、日本の歴史をイメージすることに困難を感じている。そして、海外における学校生活で日本の歴史、伝統、文化を紹介する場面で当惑した経験を持つ。また、外国の子どもたちが日本の昔の人々というときにサムライや忍者というステレオタイプのとらえ方を示したり、日本、中国、朝鮮という東アジア地域国々の特色が、未分化なかたちで提示されても、それに対する有効な回答を提示することができなかったという経験を持っている。そしてそれらを乗り越えたい、自国の歴史と文化をしっかりと学習したいという意欲を持っている。

また、教科書や歴史資料集で用いられている「大王」・「天皇」、「貴族」・「公家」、「農民」・「百姓」・「名主」、「地侍」・「国人」・「土豪」等の歴史的用語が似たような言葉でありながら、それぞれが国家や社会の構造をとらえていくときのキーワードとして、特有の意味を持っていることを理解することが難しいと強く感じている。

「帰国生徒」は、日本の歴史に関する人物や事象について「点」としてとらえることができている場合でも、時代の変化や移り変わりを大きくとらえることに苦慮し、日本の歴史を「線」的、「面」的なつながりと広がりのなかで理解していくことができるよ

うになる支援を、教師や授業にもとめている。さらに、政治、経済、外交、文化という歴史の中心的な領域だけではなく、日本人の生活の歴史についての具体的な様子を学びたいと考えている。

欧米の学校で歴史を学んだ生徒の中には、第２次世界大戦時に日本が、アジアへ侵略し欧米諸国と戦ったことについて「あなたは、このことについてどう考えているの？」と問われたとき、自分の考えを明確に説明することができなかったことが強く印象に残っている事例が多くみられる。これを一因として、年号や歴史的なできごと、人名を覚えることに重きを置いた暗記主義の歴史学習ではなく自分で考え、説明する歴史学習をもとめる傾向が見られる。

さらに、近年、中国が国際社会で急速に力を伸ばしてきていることを受け、日本が「小さな国」となりつつあると海外で実感として感じた生徒は、日本の歴史を「一国史」としてとらえるのではなく、また、欧米だけを中心と考えるのでもなく世界の歴史との関わりの中で学習していく必要があるという新しい傾向の考えも出始めている。

このような特色を有する「帰国生徒」の存在は、彼ら固有の学習課題が存在することをあらわすと同時に、一般生徒の歴史学習のあり方を豊かにしていく視点も内包しているととらえたい。

しかし、これらの課題は、教室での学習のあり方の改善だけで解消することは難しい。そこで、海外の多くの学校においては、歴史のみならず自然科学、美術や建築に関わる学習において博物館を活用したフィールドワーク型の学習が展開されていることに目をむけたい。

そのため、帰国後５ヶ月の中学校第２学年の生徒６名（男子１名、女子５名）を対象とする JSL 社会科（基礎歴史）の年間指導計画で、近世の導入学習として国立歴史民俗博物館（歴博）の活用とフィールドワークを結びつけた「江戸のまち、東京のまち」の実践に取り組んだ。

また、本校は、2010 年２月、現在の時点では国公立学校唯一の国際バカロレア機構（以下、IBO）のミドルイヤーズプログラム（以下、MYP：中等教育学校第１学年から第４学年を対象とする）の認定校となり、世界標準の学習のあり方の実現をめざしている。IBO は、歴史に関する学習に限らず、博物館をはじめとする外部の専門施設・機関、専門家と学校の学びを結びつけることを重視している。同時に、各教科の学習を、背景となっている専門的学問分野や領域からのみとらえていくのではなく、「教科間の連携」や「学びの構造」全体を意識した「ホリスティックな（人と自然・地域・世界の包括的なつながりを重視した）学習」を創造することをめざしている。日本史学習においても、音楽・美術・テクノロジー等との連携を視野に入れた歴史学習や知識理解の重要性とともに、大きく時代の特色をとらえていくための概念の獲得や文字史料や絵画・映像を読み解いていく技能、フィールドワークを通して発見した多様なことがらをレポートや歴史新聞の作成等の学習活動を通して再構成する力の育成をねらうことがもとめられる。

このような観点から、本校にとって歴博との連携を図った日本の歴史に関する授業実践の試みは、学校の存在理由そのものとダイレクトに結びついた重要な課題となってい

る。

（１）主題名　「江戸のまち、東京のまち」

（２）ねらい

世界都市・東京への発展の原点といえる江戸のまちのすがたをフィールドワークを通してとらえる。

江戸城及び本郷・加賀藩上屋敷から、支配階層である江戸幕府＝徳川家と大名の力の大きさ及びその生活を理解する。

日本橋を中心とする江戸のまちに着目することから江戸時代の政治、経済、身分、まちに暮らす人々の生活について考える。

（３）博物館との関連

歴博第３展示室は､近世を取り扱っている｡そこに展示されている江戸図屏風は、現在使用している日本書籍新社版（「現在の東京の場所と比べてみよう」というキャプションが添えられている)をはじめとして多くの中学校社会科歴史的分野の教科書及び歴史資料集に掲載されている。しかし、教科書や資料集では、江戸図屏風の細部までを十分にとらえることは難しいが､展示されている実物大の江戸図屏風レプリカの前に立つことで江戸のまちを実感することができる。

また、江戸城登城風景図屏風の部分図を用いて、江戸城大手門前で登城した大名を待つ家来の姿を、そして江戸図屏風に描かれる朝鮮からやってきた将軍への使節の姿から、これらの屏風絵に対する生徒の興味関心を高め、屏風絵を人物、建物、動物、景観に注目して多面的多角的に読み解いてこうとする意欲を生み出す。

また､広大な武家屋敷を江戸市中に構えた大名やその家臣である武士の暮らしについては､100 万石の有力大名であった加賀藩前田家の江戸藩邸図の活用が有効である。

江戸のまち及び人々の生活を理解していくための史料としての日本橋･江戸橋を中心として作成されたジオラマは、中学生の興味関心に即したものであり、特に、まちで生活しているさまざまな人々を再現したフィギュアは､単眼鏡を活用してとらえると圧巻といえる。同時に、「現銀掛け値なし」を商売のキャッチフレーズとした越後屋の看板（レプリカ）や日本橋万町の発掘調査からの出土品を中心とするモノは、江戸時代のまちの人々の息づかいとリアルな生活を伝える。さらに、女性の着物の材質や模様から､抽象的な概念である身分という近世の大きなテーマに迫っていくことができる。

第３展示室は、都市だけではなく、村や農民（百姓）の生活、海外との交流など幅広い視点から江戸時代の姿を浮き彫りにしているが、今回の実践では、フィールドワークとの関連から上記の展示物に絞りこんで見学に取り組んだ。

第３展示室の活用にあたっては、博学連携研究員会議の際、近世担当の岩淵令治准教授より「江戸のまちと人々の生活」という視点から、展示資料に関する背景を踏まえた解説､中学生を対象とする授業での活用ポイントについての指導をいただくことができた。

また、本実践の前半部となるフィールドワークの見学場所及びコース作成についても岩淵准教授の指導・助言がその基礎となっている。

３．指導計画（全７時間扱い）

（１）事前学習：江戸時代や現在の東京につながる江戸のまちや人々の生活に関する「イメージマップ」を作成してみよう

（２）JSL 社会科（基礎歴史）フィールドワーク・「東京のまちを歩き、江戸のまちや江戸の人々の生活をみつけよう」

過程	時間	○学習活動　　●学習内容	指導上の留意点
導入	５分	○地形図：「東京首部」（２万５千分１地形図）、「日本橋」（１万分１地形図）で集合場所及び東京大学本郷キャンパスの位置を確認する。	・フィールドワーク活動中の安全上の注意を確認させる。
展開Ⅰ 本郷・旧江戸城フィールドワーク	30分 45分	＜大名と武士の生活＞ ○「かねやす」・赤門の表示の読み取りをおこなう。 ●江戸のまちの広がりと大名屋敷の特色。 ＜幕府の権力と大名、権力者と庶民＞ ○岩淵准教授から、江戸城が徳川家による政治の中枢機能を果たすとともに大手門など主要な城門の前には、登城する大名の行列が集中し、民衆に権力を誇示する場となった、という解説をうける。 ●登城した大名を待つ家来や朝鮮からの使節のようす。	・心字池周辺の高低差に注目させる。 ・江戸図屏風の部分を活用する。 ・東日本大震災で崩落した櫓や石垣の修復に注目させる。
展開Ⅱ 日本橋フィールドワーク	45分	＜町人のまちとしての江戸＞ ○絵地図と地形図から現在地を確認する。 ○町人地・日本橋地区を歩き、江戸時代から続いている老舗を見つける。 ●五街道の起点としての日本橋。 ●日本橋駿河町越後屋の繁栄と金座。 ○歌川広重の浮世絵に描かれた日本橋を読み解く。	・旧江戸城内堀と外堀跡に注目させる。 ・絵画資料に描かれたすべてのことが事実ではないことに気づくとともにその理由を考えさせる。
展開Ⅲ	60分	＜江戸の食＞ ○「嶋村」店主・加藤一男氏から江戸の料理についての解説を聞く。 ●江戸の料理と江戸前（てんぷら・刺身）。 ○地形図にフィールドワークのルートを記入する。 ○午前中のフィールドワークについての感想を	

		交換する。	
展開ⅳ 国立歴史民俗博物館第３展示室 見学	25分 20分	○江戸橋広小路模型から江戸のまちに生きる人々と生活のようすを職能、身分に注目してつかむ。 ●町人地の区割り（広小路・火の見櫓・大店・床店・河岸）とはたらく人々に注目。 ●身分と差別をめぐる問題。 ○江戸図屏風を見て午前中のフィールドワークで歩いたおよそのコースを確認する。 ●江戸図屏風の読み解き。	・単眼鏡を活用し、人に注目するように助言する。 ・船が果たした役割にきづかせる。 ・江戸近郊の農村地域にも着目させる。
まとめ	10分 10分	○近世遺跡の発掘調査の結果からわかってきたことをまとめる。 ○「帰国生徒」の視点から江戸時代の日本と世界とのつながりを見つける。	 ・記録メモの活用する。

（３）**事後指導**：JSL 社会科（基礎歴史）フィールドワークの学習を「歴史新聞」にまとめてみよう

４．実践の概要

（１）「江戸のまちの生活についてのイメージマップ」作成

＜マップ１　海外滞在年数：13 年６ヶ月＞

下町
江戸っ子　　元気
江戸時代・江戸のまち人々の生活
侍

＜マップ２　海外滞在年数：５年４ヶ月＞

服　　武士　刀
店　食べ物　　文化
江戸時代・江戸のまち人々の生活
外国とのつながり　ヨーロッパ

＜マップ３　海外滞在年数：５年６ヶ月＞

100年前・200年前　　げた
屋台　　服装　着物
江戸時代・江戸のまち人々の生活
新撰組　　ペリー来航
黒船

＜マップ４　海外滞在年数：２年＞

コンクリートでない日本橋
木の家
江戸時代・江戸のまち人々の生活
はちまき　たび　はっぴ

＜マップ５　海外滞在年数：４年 11 ヶ月＞

武士　　坂本龍馬
徳川

江戸時代・江戸のまち人々の生活

火事　商人　質屋　大工
外国　　キリスト教の禁止　　開国

江戸のまちの生活という点から、衣食住に関する語句がマップに記述されているが、身分や職能と生活のむすびつきから、江戸のまちが将軍、大名を頂点とする武士や多様な仕事に携わる町人によって構成されていることをとらえていくことがフィールドワーク及び歴博見学の学習課題として浮かび上がってきた。また、武士や町人が江戸のまちで日々、どのような生活をおくっていたのかという具体的な姿をとらえていきたいという歴博見学のめあてが出された。

江戸時代の対外関係という点では、キリスト教の禁止、オランダとの貿易、ペリーの来航というように欧米諸国との関係に目が向いている。そこで、歴博見学を通して朝鮮や琉球との正式な使節交換、中国（清）との貿易という東アジアとのつながりを意識できるようになることをねらいとしたい。

さらに、学校所在地である練馬区が江戸野菜を代表する練馬大根の産地であったということから、下肥の収集と野菜の供給をはじめとして、江戸のまちで暮らす人々の生活を支えていた近郊農村の役割にも気づかせたい。

（２）JSL 社会科（基礎歴史フィールドワーク）

①実施日　2012 年 1 月 21 日（土）

②コース

＜フィールドワーク＞

東京メトロ・本郷三丁目改札口集合　→　「かねやす」　→　東京大学本郷キャンパス・「赤門」　～　心字池　→　旧江戸城（皇居坂下門～大手門）　→　大手町大名屋敷跡地　→　日本橋地区（江戸時代から続く老舗・ふとん（当時は蚊帳）の「西川」、海苔の「山本」、呉服の「白木屋」＝コレド日本橋、「越後屋」＝三越本店）　→　昼食（1850 年創業、江戸料理の割烹「嶋村」）

江戸のまちの広がり　本郷・「かねやす」

旧江戸城　坂下門付近

＜国立歴史民俗博物館第３展示室見学＞

見学に当たっての諸連絡（太田歩氏）　→　第３室見学：日本橋・江戸橋付近のジオラマ　→　江戸図屏風　→　加賀藩前田家上屋敷絵図　→　日本橋万町からの出土品　→　越後屋看板　→　江戸の人々の娯楽　→　江戸時代の日本と世界のつながりを見つけよう

５．成果と課題　―JSL 社会科（基礎歴史）フィールドワークの生徒の感想と意見を中心として―

○今回のフィールドワークに参加して、自分の知らなかった「江戸」に出会うことができました。・・・メインの日本橋では、昔の地図を確かめながら歩いたので、時代の変化を感じることができました。越後屋から発展した三越本店のビルは、ニューヨークのフラットアイアンビルに似ていて少し、懐かしくなりました。完成度の高いジオラマを見て、広場の近くに火のみやぐらがあることから、江戸の人たちが火事を警戒していることがよくわかりました。

江戸橋・日本橋ジオラマをとらえる

○東京大学本郷キャンパスでは、大名（藩主）の持つ力の大きさに驚きました。その後、岩淵先生に説明していただいた江戸城では、すべての中心であった将軍と家来の関係について理解することができました。

・・・岩淵先生といっしょに日本橋を歩いて、東京には、江戸の町から変わらないものがたくさんあり、つねに動き続ける時の中で、大切に守られてきたのだと感じました。江戸の店、橋など・・。

○国立歴史民俗博物館の模型の中に置かれた人たちから、町人たちがのびのびと自由に生活していたのではないかと思いました。でも、女の人がとても少なかったことやおかねや食べ物をもらう乞食ではないかと思われる人がいることがとても気になりました。このことから、江戸のまちに格差があったと考えてよいのでしょうか。

・・・江戸図屏風に近づいてみたらお祭りや競馬をしていることに気づきました。今回のフィールドワークでは、江戸のまちの中心を歩いたのですが、江戸図屏風には、江戸のいなか＝農民が暮らしていた場所も描かれていました。私の家や学校がある練馬区はどんな感じだったかな？

江戸図屏風を読み解く

○フィールドワークで、江戸時代は平和な時代だったという印象を強く持ちました。同時に、僕はこの事実にとても驚いています。なぜなら、これまでは、江戸時代は、武士が支配者として町の中を威張って歩いてい

る怖い時代だと思っていたかです。

また、戦争を考えた江戸城の門の構造や最大の災害といえる火災に備えたまち作りに江戸時代の人々の知恵と技術を感じました。

IBOのMYPでは、教師主導による一斉講義を中心とする注入主義的な学習ではなく、教師が提示する教材、資（史）料に基づきながら、生徒が自らの興味や関心に応じて、学習の目標を定め、探究的に学んでいくという構成主義な学習観や授業の重要性が強調されている。このことは、４月から全面実施される学習指導要領がめざす「生きる力」の育成と歴史的事象を「暗記」する学習から社会や時代の特色・変化および歴史的事象の関係性を「自分の言葉で考える」学習へむけての歴史学習転換の基盤ということができる[1]。

「将軍や大名と家来の関係」、「大名（藩主）の権力の大きさ」、「町人たちがのびのびと自由に生活していた」、「江戸のまちに格差があった」、「江戸時代は平和な時代であった」という生徒の記述から、フィールドワークで歩いたまちや博物館展示物の背景に潜む不可視で抽象度が高い社会構造や社会における関係性への確かな接近＝歴史的思考の足跡がみられる。

古地図や絵図・絵画資料を用いて実際にその地域を歩くフィールドワーク学習で、現在のまちの中で歴史を発見していくことは、生徒にとって新鮮な驚きと楽しさを感じる。教室における授業を通して日常的、継続的に生徒の歴史的知識や歴史認識の獲得、形成していくとともに生徒の歴史的見方や考え方を広げ深めていくためには、探究型フィールドワークを試みていくことが必要である。同時に、フィールドワークの現場では、学習対象とする歴史的時代に関わる事象以外の要素も混在している。そこで、フィールドでの学習と江戸のまちについて焦点化した歴博展示見学、解説機能をつなぐことにより、教室での学習を深化、発展させることが可能となる。

このような一定の成果が見られたとはいいながら、中学生、とりわけ「帰国生徒」にとって、博物館のすべての展示資料を理解、活用するということは容易ではない。学習のねらいや生徒の実態を十分に吟味することなく安易に歴博を訪問するといういわば丸投げの見学学習を展開するならば、多くの珍しいモノの前を生徒が短時間で通過していく「見物学習」が、確実に現出されることとなるだろう。このことは、教師自身が歴博の展示資料と真摯に向き合い、「考える」歴史学習のあり方を探求していく重要性を意味する。

６．私が考える歴博活用案

本実践事例は、「帰国生徒」（５名）を対象とするフィールドワークと歴博第３展示室見学というものであったが、学年すべての生徒を対象した歴博活用実践のあり方を考えてみたい。その際、学校外で実施するフィールドワーク及び歴博見学を、社会科年間

1　伊藤純郎　「『自分の言葉』で表現する歴史学習―歴史は暗記物ではない」　文部科学省教育課程課編『月刊　中等教育資料』2011年６月号　ぎょうせい

指導計画および学校の教育計画に位置づけることがもとめられる。同時に、生徒の安全確保という視点から、教員引率及び指導体制、生徒の旅行傷害保険加入等の整備が極めて重要となる。

以下、すべての生徒を対象とするフィールドワークを取り入れた歴史学習を実践するために、歴博貸し出し教材「江戸図屏風」、教師が撮影した歴博第３展示室及び寺子屋れきはくでの体験に関するビデオと写真教材を活用した学習指導案を示す。

（１）授業主題　「江戸のまち、江戸で暮らす人々」

（２）本時の目標

①武家地で暮らす将軍・大名・武士に着目し、行政、外交の中心としての江戸のまちの機能を理解する。

②町人地で営まれる江戸の人々の日常生活のようすを、交通・流通・娯楽・教育などから理解する。

③歴博資料及び写真・映像を活用し、フィールドワーク及び歴博見学への意欲を高め、生徒各自の学習課題を明確とする。

（３）本時の展開

	○学習活動	指導上の留意点
導入 5 分	○現在の「東京首部」は、いつごろ、どのように形作られてきたのか写真を手がかりとして考えてみよう。 ○1万分１地形図中に写真で提示された場所をマークする。	・旧江戸城（大手門・天守台跡）・日本橋・越後屋（三越本店）・東京大学赤門の写真を準備し、大型テレビモニターで提示する。 ・日本橋～本郷３丁目までの距離を測る。
展開 Ⅰ 15 分	○歴博貸し出し教材「江戸図屏風」を床上に広げ、提示する。 ○建物・まちなみ・人物・動物・景観について「江戸図屏風」から発見したこと・よくわからないことを記入しシートに書き出す。 ○将軍徳川家光を「江戸図屏風」のなかから見つけ出す。	・左隻・右隻など屏風の形式と見方について説明する。 ・江戸城・日本橋周辺についてはカラーコピープリントを配布する。 ・「江戸図屏風」の構図から方位方角を考えてみる。
展開 Ⅱ 25 分	○「江戸図屏風」「江戸城登城風景図屏風」から江戸城の前に集まる人々を考える。 ・暇そうに遊んでいる家来たち ・日本の服とは違う衣装の人々の行列 ・現在の皇居前広場あたりに集まる見物客 ○「加賀藩上屋敷図」を読み解く。 ○町人地の構造と町人の生活について考える。 ・広小路と火の見櫓	・「江戸城登城風景図屏風」から大名と家来の関係について考えてみる。 ・歴博展示写真を提示する。 ・歴博展示、江戸橋・日本橋再現ジオラマを撮影したビデ

	・店の大きさの比較 ・ジオラマ中の人物に注目し、町人たちがどのような仕事をしていたか考える。 ・河岸と水運 ・越後屋、白木屋の位置確認	オを上映する。 ・女性に注意を向ける。 ・米や魚などの流通。 ・「越後屋看板」の写真の提示する。
	○江戸の人々の娯楽、旅（交通）。 ○寺子屋で、子どもたちはどのように学んでいたのだろうか。また教材として使われていた往来物（東京学芸大学所蔵）から江戸時代の子どもの学習内容を考える。	・軽業師・浮世絵・旅籠の写真を提示する。 ・学校近くに富士街道が通っていることに触れる。 ・両国橋付近には芝居小屋が建てられたことも触れる。 ・寺子屋体験ビデオの上映。
まとめ ５分	○フィールドワーク及び歴博見学で自分の目で確かめたいことを記入シートに書き出し、発表する。 ○江戸のまちの中心部について学習してきたが、当時、学校の位置する練馬はどうであったかを「練馬大根記念碑」、「筆子塚」の写真から予想する。	・帰国生徒をはじめとして、江戸時代の対外関係に関心を示す生徒には、授業後、個別に対応する。 ・地域の農家（本橋家）から昭和30年代まで使用されていた農具を借り、提示する。

（４）本時の評価

①歴博展示資料及び写真、ビデオ教材から江戸のまちの中心部である江戸城及び日本橋の位置と武家地、町人地についての理解が深まったか。

②フィールドワーク及び歴博見学についての自分の学習めあてが定まったか。

③江戸のまちと身近な地域である練馬の村とのむすびつきをとらえることができるようになったか。